

## 第1回 学部合同入学式

宮島 昭夫 氏 ～祝辞～

新入生の皆さん。ご父兄の皆さま。ご入学おめでとうございます。

ただいまご紹介頂きました宮島です。今から39年前の今日、私も皆さんと同じように早稲田に入りました。そして、1981年4月、後で紹介する奥君や香川君、戸谷君という早稲田の3人と共に外務省に入って34年。館員5名の中東湾岸のオマーンで外交官としての仕事を始め、ワシントン、ソウル、NY、ロンドンの在外公館や外務本省で、アジア、米国、国連、テロ・人権等様々な仕事をしてきました。昨年夏、2020年オリンピック・パラリンピック大会の成功のため、舛添東京都知事を補佐すべしと命じられ、ロンドンから突然帰国し、東京都外務長になりました。

そこでまず、皆さんの多くが社会人として迎える2020年大会と東京のことからお話してみたいと思います。これからの5年間は絶対にダイナミックでワクワクすることがたくさん起きるでしょう。

2012年のロンドン大会のことはみなさんご記憶と思います。2020年大会まであと5年。2016年のリオ大会後は、世界の注目が日本、東京に集まります。世界から、「やはり東京がホストで良かった」、「さすがは東京だ」といわれるようなオリンピック、パラリンピック大会にしなければなりません。同一都市でパラリンピックを2回目に開催するのは世界初めてです。日本が元気と自信を取り戻し、未来に向かって世界にポジティブなインパクトを与える絶好のチャンスです。compactで環境に配慮した、史上最高の大会を目指し、早稲田の卒業生でもある森元総理を会長とする大会組織委員会や国と連携して、着実に準備を進めています。新国立競技場をはじめとする競技施設の建設がこれから本格化します。大規模な街造り・再開発プロジェクトも各地で進行しています。5年後には、ウォーターフロントをはじめ東京の景観は間違いなく大きく変わります。バリアフリー化、多言語対応、水素社会の実現等ハード/ソフト両面で2020年大会後にポジティブなレガシーを残すことは重要な課題です。また、東京は日本全体の人口の1割、1300万人、GDPの2割を占めるメガ・シティ。今、世界の大都市間では熾烈な競争が展開しています。昨年発表されたある世界都市ランキングによれば、ナンバー1はロンドン。NY、パリ、東京は4位です。その後、シンガポール、ソウルが続きます。知事の目標は、2020年大会の成功を起爆剤として東京を世界一のグローバル都市にすることです。世界中の有能な人材、マネー、情報が流れ込む、ダイナミックで元気な東京を実現するため知恵を絞っています。私自身も先日初めて二酸化炭素を一切出さない、エンジンの無い、

燃料電池車に試乗する機会を得ましたが、「未来を創る東京」Tokyo creates the futureが我々の合言葉です。この8か月、2020年大会の成功と東京を世界一のグローバル都市にするとの目標達成のため、外交官としての経験を活かして都市外交を積極的に推進してきました。知事のソウル、ロンドン、ベルリン訪問に同行し市長や政府首脳にお目にかかったり、東京で英国やデンマークの皇太子へのおもてなしをしたり、新たなチャレンジに忙しい毎日です。

さて、そこで、皆さんの門出にあたり、私の人生に強烈なインパクトを与え、心から尊敬しているお二人のことをお伝えしたいと思います。外交官の仕事の魅力と醍醐味は、歴史の転機にその現場の近くにいられること、そして、ドラマチックなまでの出会いです。楽しいことも沢山ありましたが、とても悲しいこともありました。

一人目は、中田厚仁さん。20年もの内戦が続いたカンボジアで、ようやく停戦が成立し国連支援の下で1993年5月に総選挙が行われることになりました。日本の平和貢献、自衛隊のPKO派遣が国内で議論されている時でした。「夢は世界を平和にすること」と言っておられた中田さんは、大学卒業直前に国連ボランティアに志願しカンボジアに赴任、総選挙について説明するため村々を回りました。そして、もっとも危険と言われていたコンポントム州で勤務中に何者かの襲撃に遭い亡くなりました。25歳でした。「だけれども、僕はやる。この世の中に誰かがやらなければならないことがあるとき、僕はその誰かになりたい」との言葉も残して。22年前、新入生の皆さんが生まれる前の1993年4月8日です。私は当時アジア局でカンボジアを担当。出張先のベトナム・ハノイから中田さんのご家族とバンコクで合流しプノンペンに赴き、ドイツ軍野戦病院のトレーラー車両内で、深い悲しみに包まれたご家族のご遺体との対面に同席しました。お母様は厚仁さんが生まれた時に自宅の庭に植えた桜の一枝を持参し、手向けられました。その直後に行われた記者会見で、お父様の武仁さんは、涙をこらえながら、「カンボジアの人を決して恨んだりしない、厚仁はそんなことは望んでいない、カンボジアの平和のために命を懸けた息子の遺志を継ぐ」、と言い切られました。私は感動しました。お父様は、その2年後にこの本『息子への手紙』を書かれました。そして15年間国連ボランティア名誉大使として25カ国以上の国々を回り、平和の大切さを説き、ボランティアの支援に取り組み、見事に厚仁さんの遺志を継がれました。

もう一人は、奥克彦大使。彼は早稲田政経政治学科からの外務省同期入省でしたので、奥君と呼ばせていただきます。奥君は大学2年までラグビー部。外務省に入ってから、英国オックスフォード大に留学しラグビー部のレギュラーとして活躍、そ

の後、ロンドンの大使館で広報文化担当をしていた時、イラク復興支援のために、早稲田の同じクラスで恋愛結婚した奥様と3人のお子さんをロンドンに残して、単身赴任しました。イラク戦争は2003年3月に開始され、まだ戦闘が続き治安状態の不安定な4月下旬に、オーストラリア外交官と2人で、クウェイトからバグダッドまで700キロ四輪駆動の車を運転してイラク入り。それから、8ヶ月間イラク国内をくまなく車で走り回り、どこに何が足りないのかを調べ、防弾チョッキもつけずにイラクの人々の中に入っていました。彼は将来の日本とイラクの関係の礎となる、イラクの子どもたちを支援する意義を深く感じていました。奥君は、こう書いています。「でも救いはあります。それは子供達の輝く目です。学校へやってきて、日本の支援に触れてくれれば、いつか大人になってもその記憶が心に蘇るのではないのでしょうか」。しかし、11年前、皆さんが小学校に入ったころ、2003年11月29日、イラクのティクリットで、同僚の井ノ上さんと共にテロリストの襲撃により殉職しました。45歳でした。その221日間の活動報告『イラク便り』がこれです。イラク復興の現場での熱い思いを、激務の合間に71回に亘り書きつづったものです。イラク戦争時、私は、9/11後の小泉・ブッシュ首脳会談等日米関係を担当し、彼が殉職したときはソウル勤務でした。12月初めの葬儀の前夜、奥君の棺を前に、日夜粉骨碎身、イラク復興のため文字通り命を懸けた仲間を失った悲しみに涙が止まりませんでした。それから11年、昨年12月13日、オックスフォード大学のラグビー場で、第10回奥記念杯ラグビー試合がおこなわれました。私は、日本から駆けつけ、勝利チームに奥トロフィーを授与してきました。日英のアマチュアのラグビー達の絆に感激すると同時に、改めて志に殉じた奥君をすごい奴だと思いました。卒業時のインタビューでは、「捨て石でいいから、誰もいないところへ行って、普通の人が嫌がるような仕事をしようと思う」と初心を語っていました。まさに初志貫徹。何事にも積極的で、ハートの温かい、行動力のある、魅力的な男でした。

この二人とも、強い使命感を持って困難な課題に命を懸けて積極的にチャレンジし、志半ばにして壮絶な最期を遂げられました。是非、彼らのことを覚えておいてほしいのです。

ここで、みなさんへの要望を3つ申し上げます。

まず1つ目は、過去を忘れないこと。みなさんは、これから日本と世界の未来を作ってゆきます。しかし、明るい未来を創るためには、歴史を学び、過ちを繰り返さないことが大切です。今年は戦後70周年。さまざまな節目があります。今日ご紹介した2人のことを含め、よく学び、自分のハートで感じ、頭で考えてください。今月は両陛下がパラオのペリリュー島に慰霊のため訪問されます。私も、かつて太平洋のマーシャルやガダルカナル、硫黄島の玉砕の地の慰霊碑にお参りしました。4

年前の東日本大震災のことも絶対忘れないこと。甚大な被害のみならず、世界中から寄せられた温かい支援についてもぜひ覚えていてください。まだ行ったことのない人は、被災地にぜひ一度行って、心に刻み込んできてください。

2 つ目は、現在を思いっきり生きること。グローバル時代そして不確実性の時代に備えること。自分を鍛えること。「世界と共に生きる」しか、日本に道はありません。外国語の習得は不可欠です。英語に加えもう 1 つの言語の基礎をしっかりと身に付けること。世界が広がります。そして、ぜひ、積極的に外国へ飛び出してください。百聞は一見に如かず。さまざまな友人を作ってください。海外に行かなくても早稲田には世界中から優秀な留学生が来ています。同時に、グローバル時代に、根無し草では困ります。魅力もありません。日本のこと、みなさんのふるさと、私の場合は金沢ですが、自分のルーツのことをぜひ改めて学び、身につけて、魅力的な人間になる努力を重ねてください。

3 つ目は、未来に射程を合わせること。5 年後 2020 年夏の東京オリンピック・パラリンピックの成功には 10 万人近くの都市ボランティア、大会ボランティアが必要とされます。ロンドンでは、game maker として大活躍しました。皆さんの力に大いに期待しています。単に TV で試合を見るだけでは、後悔します。皆さんにとって貴重な経験になることは間違いありません。先日、ブラインドサッカーを初めて観戦しましたが、驚くばかり。パラリンピック、障がい者スポーツに、もっと関心を持ってほしいと思います。また、その前年 2019 年の秋にはラグビーワールドカップが日本各地で開かれます。これは、オリンピック、サッカーワールドカップとならぶ世界 3 大スポーツ大会。実は、奥君の夢の 1 つがラグビーワールドカップ日本招致でした。英国勤務時代にその夢は果たされませんでした。友人や仲間たちにその遺志が引き継がれての開催です。ラグビーを観戦したことのない人は、ぜひ、早稲田ラグビー部を応援に行き、2019 年には世界一流のラグーたちの激闘を見に行ってください。奥君もきっと喜びます。

最後に提案があります。まず、できたら、日付けなしの 3 年連用日記を 2 冊買ってください。そして、その 2 冊目にオリンピック・パラリンピック開会式の 2020 年 7 月 24 日、8 月 25 日に印をつけてください。毎日でなくても、2020 年までの心の記録を書き留めることができれば、きっと、人生の宝物になります。

次に、一度しか無い人生だから何事にも前向きにチャレンジして、好奇心をもって多くのものを自分の目で見て、考え、悩み、行動すること。皆さんには時間と体力があります。それをフルに活かしてください。『夢はでっかく、根は深く』 私の

大好きな、相田みつをさんの言葉です。大きな夢を持ち、地道に努力を続けてください。成功するまでやれば、当たり前ですが、失敗しません。そして志がぶれないためには、根は深くなければなりません。『年を重ねただけで人は老いない。理想を失う時に初めて老いがくる。歳月は皮膚のしわを増すが、情熱を失う時に精神はしぼむ。』サミュエル・ウルマンの「青春」という有名な詩の一節です。これが容易なことでないことは、ご父兄の方はよくご存じだと思います。

また、好奇心や行動力は大事ですが、その際、ぜひ気をつけてほしいのは、傲慢にならないということです。世の中には、立派な人、多くの知恵と知識を持った人がたくさんいます。彼らから学ぶには、謙虚でなければなりません。ご両親、よき友、よき師に恵まれたから、今日の君たちがいます。感謝を忘れてはなりません。人間一生勉強です。私は、大学で学んだゼミの鴨武彦先生から、卒業後、「最近面白い本読んだかね」と言われるたびに、自らの怠慢と不勉強さに恥ずかしい思いをしていました。

鎌田総長がおっしゃったように、今日の早稲田には素晴らしい設備等があるのだと思いますが、早稲田の特徴の一つは、雑多なこと、群れないことです。目標や志をもって、どんどん伸びて行く人と流されて行く人のギャップが極めて大きくなる所です。大学は予備校や塾ではありません。面倒見を期待してはいけません。でも出会いやチャンスはたくさんあります。それを活かせるかどうかは皆さん次第です。

人生には、多くの偶然があります。運不運もあります。挫折もつきものです。でも運命の女神が大好きなのは、勇気、謙虚さ、笑顔の持ち主です。

皆さんの健闘を祈ります。

Good Luck.

#### ◎文中ご紹介図書

『息子への手紙』 中田 武仁 著 1995年 朝日新聞出版

『イラク便り：復興人道支援221日の全記録』 奥 克彦 著 2004年 産経新聞ニュースサービス 扶桑社文庫

#### ○関連図書

『私は国連ボランティア：息子厚仁の遺志を継いで』 中田 武仁 著 2001年 中央公論新社